

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	『楚辞』における自然の音について
Author(s)	阿部, 正和
Citation	中國中世文學研究 , 54 : 19 - 33
Issue Date	2008-09-29
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051403
Right	
Relation	



『楚辞』における自然の音について

阿部正和

はじめに

中国古典詩には自然の音が多く詠まれる。稿者は先に、漢以前の古代歌謡である『詩経』の自然の音について、鳥は特別な対象となつてゐるものの、これ以外の音については細かく描き分けようとする意識は乏しいことを指摘した。⁽¹⁾

では『楚辞』においては、自然の音はどのように表現され、その音を「き（聴・聞）」くことは、どのような意味を持っていたのであろうか。本稿では漢以前の作とされる『楚辞』諸作品の自然の音について、『詩経』と比較しながら、その特徴を考察していきたい。⁽²⁾

一 『楚辞』の自然の音—『詩経』との比較—

小尾郊一氏は、『詩経』では簡潔で細かい技巧的な自然描写は見られないのに対して、『楚辞』では細緻な自然描写が見られるようになる。⁽³⁾この小尾氏の指摘は、視覚に限らず聴覚的にも言うことができるようであり、以下でそのことを確認しておきたい。

まず『詩経』『楚辞』ともに、用例数が比較的多い「風」

の描写について見ていく。

『詩経』邶風・北風

北風其喑 北風 其れ喑たり

雨雪其霏 雪雨る 其れ霏たり

毛伝「喑疾貌。」（喑は疾き貌。）

集伝「喑疾声也。」（喑は疾き声なり。）

風について、『詩経』邶風・北風は、北風が激しく吹く様を「喑」というオノマトペを用いて表現する。

『詩経』鄭風・風雨

風雨瀟瀟 風雨 瀟瀟たり

鷄鳴膠膠 鷄鳴 膠膠たり

毛伝「瀟瀟暴疾也。」（瀟瀟は暴疾なり。）

集伝「瀟瀟風雨声。」（瀟瀟は風雨の声。）

また鄭風・風雨は、激しい風雨の様子を「瀟瀟」というオノマトペを用いて表現する。このように風について『詩

『楚辞』九歌・湘夫人

帝子降兮北渚 帝子 北渚に降る

目眇眇兮愁予 目 眇眇として予を愁へしむ

嫋嫋兮秋风 嫋嫋たる秋风

洞庭波兮木葉下 洞庭 波だちて木の葉 下る

王逸「嫋嫋秋风搖木貌。」（嫋嫋は秋風の木を搖する貌。）

これに対して『楚辞』九歌・湘夫人は、秋風が洞庭湖を渡り、湖上を波立たせ、木々の葉を揺らす様を描写する。

以上風については、『詩経』はその激しさだけを描写するのに対して、『楚辞』は風の動きを細かく捉えて描写しようとする。ただし「嫋嫋」については、王逸が風が木を揺らす様と解釈するように、音を表すと断定することはできない。

次に『詩経』と『楚辞』の描写の違いが、より現れている川について見ていく。

『詩経』鄭風・溱洧

溱与洧 溱と洧と

方涣涣兮 方に涣涣たり

毛伝「涣涣春水盛也。」（涣涣は春水の盛んなる

り。）
集伝「涣涣春水盛貌。」（涣涣は春水の盛んなる貌。）

『詩経』鄭風・溱洧は、溱水と洧水が春になって、水が盛んに流れる様を「涣涣」というオノマトペを用いて表現する。

『詩経』小雅・鼓鍾

鼓鍾将将 鍾を鼓つこと将将たり

淮水湯湯 淮水 湯湯たり

集伝「将将声也。湯湯沸騰之貌。」（将将は声なり。湯湯は沸騰の貌。）

また小雅・鼓鍾は、淮水が沸き立って流れる様を「湯湯」というオノマトペを用いて表現する。このように『詩経』は、河川が流れる情景を漠然と描写するに過ぎない。

『楚辞』九章・悲回風

馮崑崙以瞰霧兮 崑崙に馮りて以て霧を瞰

隱岐山以清江 岐山に隠りて以て江を清ます

憚涌湍之礚礚兮 涌湍の礚礚たるを憚り

聽波声之洶洶 波声の洶洶たるを聴く

紛容容之無經兮 紛容容として之れ經無く

罔芒芒之無紀 罔芒芒として之れ紀無し

軋洋洋之無從兮 軋りて洋洋として之れ從る無く

馳委移之焉止 馳せて委移として之れいづくにか止

まらん

補注「礚石声。洶水勢。」(礚は石の声。洶は水の勢。)

朱注「礚礚水石声。洶洶風水声。」(礚礚は水石の声。洶洶は風水の声。)

これに対して『楚辞』九章・悲回風は、主人公が崑崙山から岷山・江水を巡る中で、湧いて流れ出る早瀬の様子を描写する。その際、早瀬の中で鳴る石の音を「礚礚」、波立つ音を「洶洶」というオノマトペを用いて表現する。そしてその流れが乱れ動き、果てしなくて川筋が見えず、波がぶつかり合い広がって定まらず、うねり曲がつて馳せる様子を描写する。

以上川については、『詩経』が河川の流れる様を漠然と描写するのに対して、『楚辞』は早瀬の中で鳴る石の音、波立つ音を捉え、その流れの動きも描写する。

この他にも九章・悲回風は、江水が逆流し潮と水が撃ち合う音を「聴く」という例がある。ここでもぶつかる波の様を聴覚的に細かく捉える。

『楚辞』九章・悲回風

悲霜雪之俱下兮 霜雪の俱に下るを悲しみ

聴潮水之相擊 潮水の相撃つを聴く

『楚辞』は細部を捉えて描写することを特徴とするが、それは、視覚的な描写だけでなく、聴覚的な描写にも言及することができるのである。

このように『楚辞』が視覚的にも、聴覚的にも自然の細部を捉えようとしていることは、次のような時節や周囲の状況を表す場合にも見られる。

『楚辞』九章・涉江

深林杳以冥冥兮 深林 杳として以て冥冥たり
乃猿狖之所居 乃ち猿狖の居る所なり

山峻高以蔽日兮 山は峻高にして以て日を蔽ひ

下幽晦以多雨 下は幽晦にして以て雨多し

霰雪紛其無垠兮 霰雪 紛として其れ垠無く

雲霏霏而承宇 雲 霏霏として宇に承く

九章・涉江は、深く暗い林、日を蔽う険しく高い山、奥深く暗くて雨が多い谷、乱れ降り果てが見えない霰・雪、立ちこめて家の軒に続く雲と、光の強弱や対象の形状までも視覚的に捉えて、山中の情景を細かく描写する。『詩経』にも視覚的なものを並べて情景を描写する例はあった。

『詩経』豳風・東山

我徂東山 我 東山に徂ゆく

惛惛不歸 惛惛として歸らず

我来自東 我 東より来れば

零雨其濛 零雨 其れ濛たり

果贏之実 果贏の实

亦施于宇 亦 宇に施く

伊威在室 伊威 室に在り

蠨蛸在戸 蠨蛸 戸に在り

町唾鹿場 町唾は鹿場

熠燿宵行 熠燿 宵に行く

幽風・東山は、帰還する兵士が想像する荒廃した故郷の様を、植物、虫、動物を並べて描写する。しかしここでは「施」「在」などと、その状態・存在を示すだけで、『楚辞』のように、その場の情景を細かく描写しようとしていない。

この視覚的な描写と同じようなことが、聴覚的な描写にも言うことができる。

『楚辞』九弁

燕翩翩其辞焱兮 燕は翩翩として其れ辞し焱り

蝉寂漠而无声 蝉は寂漠として声無し

雁雁雁而南遊兮 雁は雁雁として南遊し

鷓鴣啁晰而悲鳴 鷓鴣は啁晰として悲鳴す

独申且而不寐兮 独り且を申へて寐ねられず

哀蟋蟀之宵征 蟋蟀の宵に征くを哀しむ

九弁は、和し鳴く雁の声、悲しげに鳴く鷓鴣の声、夜通し鳴く蟋蟀の声と、三種類の自然の音を用いて秋の情景を描写する。

『詩経』にも一つの歌の中に、自然の音を多く詠む例はあった。

『詩経』幽風・七月

春日載陽 春日 載ち陽に

有鳴倉庚 鳴く倉庚有り

七月鳴鵙 七月 鳴鵙

五月鳴蜩 五月 鳴蜩

五月斯螽動股 五月 斯螽 股を動かし

六月莎鷄振羽 六月 莎鷄 羽を振るふ

十月蟋蟀入我牀下 十月 蟋蟀 我が牀下に入る

幽風・七月は、春に倉庚、七月に鵙、五月に蜩、斯螽、六月に莎鷄、十月に蟋蟀が鳴くとする。しかしこれは何月にとどのような鳥・虫が鳴くということを示すものであり、九弁のように、複数の自然の音を用いて一つの季節の情景を描写していない。

『楚辞』九歌・山鬼

雷填填兮雨冥冥 雷 填填として 雨 冥冥たり
猿啾啾兮狢夜鳴 猿 啾啾として 狢 夜鳴す
風颯颯兮木蕭蕭 風 颯颯として 木 蕭蕭たり
思公子兮徒離憂 公子を思ひて 徒らに憂に離れり

また九歌・山鬼は、夜の山中の様子を、轟く雷の音、二種類の猿の鳴き声、吹きつける風の音、風に鳴る木と、五種類の自然の音を用いて周囲の状況を描写する。このような例も『詩経』には見られない。

以上のように『楚辞』は、対象の細部や一つの情景を色々な視点・聴点で捉えようとしており、『楚辞』の繊細な自然描写は、視覚だけでなく、聴覚的な描写にもうかがえることである。

二 『楚辞』の音のきざ取り

前節では、『楚辞』が対象の細部や一つの情景を色々な聴点で捉え、聴覚的にも繊細な自然描写を行っていることを確認してきた。そしてそのような『楚辞』の自然に対する向き合い方を示すのが、次のような例である。

『楚辞』九章・悲回風

悲回風之搖蕙兮 回風の蕙を揺らすを悲しむ
心冤結而内傷 心は冤結として内に傷む
物有微而隕性兮 物には微にして性を隕とす有り

声有隱而先倡 声には隠れて先づ倡ふる有り
王逸「回風為飄。」(回風は飄たり。)

九章・悲回風はその冒頭で、飄風が吹き蕙草を揺るがせ散らすのを悲しみ、心は結ばれて胸の内が傷むとする。

小南一郎氏は、『楚辞』に度々出現するこのような風(秋風)について、「楚の地方の人々が懐いていた植物への信仰、植物的生命との一体感が、秋を植物の変衰の時期として捉え、風も秋の気の具体的な発動者として、草木を散らせてゆくものとして捉えられていた。」と指摘する。

しかしこの例で注目されるのは、後の二句に、物には蕙草のように微弱で性命を落とすものがあり、音には飄風のように目には見えないが、その先駆けとして声を挙げるものがあるとすると、秋への変化を導く風という存在を、視覚(物)だけでなく、聴覚(声)からも感じ取り、その「隠」なる変化を読み取っている点である。

このように周囲の変化(気候の変化)を、その音に感じ取る例は、鳥の声にも見ることができる。

『楚辞』離騷

及年歳之未晏兮 年歳の未だ晏れず
時亦猶其未央 時も亦猶ほ其れ未央ざるに
恐鶉馱之先鳴兮 恐らくは鶉馱の先鳴して
及べ

使夫百草為之不芳 夫の百草をして之が為に芳しからしめん

離騷は、秋分前に鳴き始め、その声で百草の香りを失わせ枯らしてしまふ鶉馱が鳴き出さないうちに、つまり歳を取り時節を失う前に出発せよ、ということが登場人物の言葉として語られる。ここでも鶉馱の声に、秋の訪れという気候の変化を感じ取っている。

『詩経』にも鶉馱^{めいげき}を詠んだ例はあった。

『詩経』 鬮風・七月

七月鳴鶉 七月 ^{めいげき} 鳴鶉

八月載績 八月 ^{すなは} 載績す

しかし鬮風・七月は、秋になれば鶉が鳴くということを示しただけで、離騷のようにその声に気候の変化を感じ取っていない。

『楚辞』 九歌・悲回風

鳥獸鳴以号群兮 鳥獸 鳴きて以て群を号^よべば

草苴比而不芳 草苴 ^{さうし} 比して芳しからず

王逸「生曰草、枯曰苴。比合也。言飛鳥走獸群鳴相呼、則芳草合其莖葉芬芳以不暢。以言讒人口衆多、盈君之耳。」(生を草と曰ひ、枯を苴と曰ふ。比は合なり。言ふところは飛鳥・走

獸 群れ鳴きて相呼べば、則ち芳草 其の莖葉を合して芬芳 以て暢びず。以て讒人の口衆多にして、君の耳に盈つるを言ふ。)

朱注「秋冬向寒、鳥獸鳴号以求群類、則草已枯矣。

雖比而合之、亦不能有芬芳之氣。」(秋冬の寒きに向かひ、鳥獸 鳴き号びて以て群類を求むれば、則ち草 已に枯れたり。比して之を合すると雖も、亦芬芳の氣有る能はず。)

また九歌・悲回風は、鳥獸が鳴いて群れを呼べば、生草や枯草が密生して芳しくないとする。この二句を王逸は、讒人が徒党を組み、その言葉が君の耳に多く入ることの喩えと解釈するが、朱熹は、秋から冬へと寒くなり、鳥獸が鳴いて仲間を求めると、草が枯れると解釈する。したがってここも朱熹に従えば、鳥獸の鳴き声に気候の変化を感じ取っている例と考えることができる。

このように『楚辞』は、風の音や鳥の声に耳を傾けることによって、秋の訪れという気候の変化、周囲でこれから起ころうとする変化を先取りしようとしている。そして、その変化を知る上で重要な要素の一つが「音」なのである。

ではなぜ目を向けるだけでなく、耳も傾け、周囲の「音」をきき取ろうとするのか。

ロラン・バルトは、「聴覚は、本質的には、時間^{||}空間的状況の見定めに結びついているものと思われる(人間

はこれに視覚を加え、動物はこれに嗅覚を加える。聴覚から構成される聴き取りは、人類学的観点からいうと、遠近の度合いの把握、音による刺激の反復の把握による空間と時間の感覚そのものである。」⁽¹²⁾と云う。

『楚辞』が風の音や鳥の声に耳を傾けるのは、この時間的狀況の見定めに結びつくものであろうが、『楚辞』にはさらに、聴覚によって「空間の獲得」を図ろうとするものも見ることが出来る。

『楚辞』九章・懷沙

傷懷永哀兮 懷ひを傷めて永く哀しみ

汨徂南土 汨として南土に徂く

胸兮杳杳 胸けども杳杳として

孔静幽黙 孔だ静かにして幽黙たり

王逸「言江南山高沢深、視之冥冥、野甚清浄、漠無人声。」（江南の山高く沢深く、之を視るも冥冥として、野甚だ清浄にして、漠として人声無きを言ふ。）

九章・懷沙は、主人公が心を傷めながら、急いで南方の地に行こうとするが、その風景は瞬いても奥深く暗く見え、とても静かで音も無くひっそりとしているとする⁽¹³⁾。

『楚辞』遠遊

山蕭條而無獸兮 山は蕭條として獸無く

野寂漠其無人 野は寂漠として其れ人無し

王逸「溪谷寂寥而少禽也。林沢空虚、罕有民也。」

（溪谷 寂寥として禽少なきなり。林沢 空虚にして、民有ること罕なり。）

また遠遊は、主人公が向かおうとする山は寂しくて獸がおらず、野はひっそりとして人がいないとする。

この二例はともに、主人公がこれから向かおうとする世界が、どのような世界なのかということが示されている。彼の前に広がるのは、目を向けても何も見えず、耳を傾けても何も聞こえない世界である。視覚的にも、聴覚的にも、何も獲得できない世界（空間）、そのような世界に進まなければならないことに、主人公は不安や恐怖を感じているのである⁽¹⁴⁾。

『詩経』にも静かな情景を詠んだ例はある。

『詩経』小雅・車攻

蕭蕭馬鳴 蕭蕭として馬鳴き

悠悠旆旌 悠悠たる旆旌

毛伝「言不謹謹也。」（謹謹ならざるを言ふなり。）

小雅・車攻は、狩猟の終わった夕暮れの中、馬が寂しげに鳴く様が詠まれる。これは、昼間の狩猟の騒がしさと夕暮れに帰還する際の静けさを対比させ、狩猟の終わ

りを描くものであり、『楚辞』のように、聴覚によって「空間の獲得」を試みるものではない。

このように『楚辞』は、視覚によって、また聴覚によって、時間・空間的状况を見定め、自己を取り巻く世界を把握しようとしているようである。そしてこのような世界を把握しようとする『楚辞』の態度が、『詩経』にはなかった「無音の世界」を発見したのではないだろうか。

いずれにしても『楚辞』において、「音」のきき取りは、視覚とともに、現前の世界を把握するための重要な行為であったと考えることができるようである。

三 『楚辞』における「き(聴・聞)く

ここまで『楚辞』の自然の音に着目し、聴点で捉えた描写や「音」のきき取りについて述べてきたが、そもそも『楚辞』において、「き(聴・聞)く」という行為は、どのような意味を持っていたのであるうか。まず「聴」の用例から見えていく。

「聴」の用例は一一例あり、そのうち七例が、人間の声(言葉・歌)を聞き届ける・聞き入れるという例である。

『楚辞』九章・惜誦

所非忠而言之兮 忠に非ずして之を言ふ所あらば
指蒼天以為正 蒼天を指して以て正と為さん
令五帝以折中兮 五帝をして以て折中せしめ

戒六神与嚮服 六神を戒めて与に嚮服せしむ
俾山川以備御兮 山川をして以て備御せしめ
命咎繇使聽直 咎繇に命じて聴直せしむ

九章・惜誦は、まず主人公が心にないことを語る事があれば、天を指して証としようとする。そしてその言葉を五帝に命じて公平に判断させ、六神を戒めて訊問に当たらせ、山川の神に陪審させ、舜の時代の名裁判官である咎繇に曲直を「聴」かせ判断させようと言う。ここで「聴」く主体は咎繇であり、咎繇に主人公が自分の言葉を聞き届けさせようとしている。

『楚辞』九章・惜往日

或忠信而死節兮 或いは忠信にして節に死し
或訑謾而不疑 或いは訑謾にして疑はれず
弗省察而按実兮 省察して実を按ぜず
聴讒人之虚辞 讒人の虚辞を聴く

九章・惜往日は、忠信で節のために死ぬ者もいれば、人を欺いても疑われない者がいるのは、君王が省察して事実を考えず、讒人の嘘を「聴」くからだとする。ここで「聴」く主体は君王であり、その君王が讒人の言葉を聞き入れることを言う。

『楚辞』大招

二八接舞 二八舞を接ね

投詩賦只 詩賦に投はず

叩鍾調磬 鍾を叩き磬を調べ

娛人乱只 人を娛しませて乱む

：

魂乎帰徠 魂や帰徠せよ

聽歌謏只 歌を聴くこと謏はれり

王逸「謏具也。言觀聽衆樂、無不具也。」（謏は具

なり。衆樂を觀聽するに、具はらざる無きを

言ふなり。）

大招は、まず十六人の女性が連接して、雅樂に合わせ舞い、鍾・磬を撃ち演奏し、人を樂しませる様子を述べる。そして魂に対して「聽」くべき歌が備わっているから帰って来いと言う。ここで「聽」く主体は魂であり、その魂に歌を聞き届けるように訴えている。

以上の例では、「聽」く主体は、主人公の上位の者や、それが派生したと考えられる魂といった主人公以外の他者となっている。また『詩經』の例も、ここまでの『楚辞』の例と同じように、他者が人間の声を聞き届ける・聞き入れるという例であった。

しかし次の例は、これらとは異なり、自然の音に耳を傾ける例である。

『楚辞』九章・悲回風

憫涌湍之礚礚兮 涌湍の礚礚たるを憫り

聽波声之洶洶 波声の洶洶たるを聴く

悲霜雪之俱下兮 霜雪の俱に下るを悲しむ

聽潮水之相擊 潮水の相撃つを聴く

：

一節にも挙げた九章・悲回風は、主人公が早瀬の波立つ音や波がぶつかり合う音を「聽」いている。ここで「聽」く主体は、主人公以外の他者ではなく、主人公自身になっている。そして対象も人間の声ではなく、自然の音であり、その音に耳を傾けている。

しかし「聽」く主体や対象には変化はあるものの、「聽」の意味そのものは、大きく変化していない。ここまで見てきたように、『楚辞』及び『詩經』の「聽」の用例は、人間の声を聞き届ける・聞き入れるという意味であった。それは、発話者の声に注意を向ける、耳を傾けるといふ意味を共有している。

『楚辞』が『詩經』に比べて、視覚的にも聴覚的にも自然の細部を捉えようとしていることは、前節までで述べてきたとおりである。この『楚辞』の特徴は、「聽」く対象が、「人事」から「自然」へと拡がったことにも示されているようである。

では次に「聞」について見ていく。「聞」の用例は一五例あり、その例はすべて何らかの情報を獲得するという意味で用いられているようである。

『楚辞』離騷

呂望之鼓刀兮 呂望の刀を鼓す

遭周文而得挙 周文に遭ひて挙げらるるを得たり

甯戚之謳歌兮 甯戚の謳歌す

斉桓聞以該輔 斉桓 聞きて以て輔に該へたり

離騷は、呂望は屠殺人として刀を打ち鳴らしていたが、周の文王に出会って挙げ用いられ、甯戚は牛に餌をやりながら歌っていたが、斉の桓公がその歌を「聞」いて補佐役にしたとする。

『楚辞』九章・思美人

情与質信可保兮 情と質と信に保つべくんば

羌居蔽而聞章 羌 居は蔽はるるも聞こゆること

章らかなり

九章・思美人は、真心と性質が本当に保てるならば、住居は隠れていても、評判は明らかにになるとする。

『楚辞』九章・惜往日

聞百里之為虜兮 百里は之れ虜と為り

伊尹烹於庖廚 伊尹は庖廚に烹る

呂望屠於朝歌兮 呂望は朝歌に屠り

甯戚歌而飯牛 甯戚は歌ひて牛に飯すと聞く

不逢湯武与桓繆兮 湯武と桓繆とに逢はざれば
世孰云而知之 世に孰か云にして之を知らん

九章・惜往日は、百里奚は秦の奴隸となり、伊尹は料理場で煮物をし、呂望は朝歌で屠殺をし、甯戚は歌いながら牛に餌をやっていたと「聞」いているが、彼らが殷の湯王や周の武公、斉の桓公や秦の繆公に逢わなければ、世に誰が彼らのことを知ったであろうとする。

『楚辞』九章・悲回風

孤子唼而攬淚兮 孤子は唼じて涙を攬ひ

放子出而不還 放子は出でて還らず

孰能思而不隱兮 孰か能く思ひて隠まざらん

照彭咸之所聞 彭咸の聞く所に照らさん

九章・悲回風は、孤独で放逐の身であることを思い傷んだ主人公が、「聞」く所の彭咸の事跡に照らしてみようとする。

『楚辞』九章・惜誦

吾聞作忠以造怨兮 吾 忠を作して以て怨みを造す

忽謂之過言 忽ち之を過言と謂ふ

九章・惜誦は、主人公が「忠信を尽くして怨みを招い

た」という言葉を「聞」き、うかつにも言い過ぎたと思つたとする。

以上の三つの「聞」は、ある事実や評判を聞き知っているとということ、この例が最も多く七例ある。

このように「聞」は、歌が聞こえてくる、人の言葉を聞かない、評判が伝え広まる、ある事実や評判を聞き知っているとという意味で用いられており、いずれも情報を獲得していることを示している。

ただし『楚辞』の「聞」には、「聴」の用法に近い例もある。

『楚辞』九章・惜誦

退静黙而莫余知兮

進号呼又莫吾聞

し

退きて静黙すれば余を知る莫く

進みて号呼するも又吾に聞く莫

九章・惜誦は、主人公が退いて静かに黙っていていても誰も私の事をわかつてくれず、進み出て叫び呼んでも誰も私の言葉を「聞」いてくれないとする。ここで「聞」は、耳を貸さないということであり、「聴」に近い。

このように、「聴」と区別したい用例もあるものの、「聞」の多くは、何らかの情報(歌・言葉・事実・評判)を聞き知ること、すなわち情報の獲得を意味すると言いうことができるようである。

そしてそれは次のような例でも同じである。

『楚辞』九章・悲回風

登石巒以遠望兮

路眇眇之默默

入景響之無応兮

聞省想而不可得

王逸「竄在山野、無人域也。目視耳聴、歎寂然也。」

也。」(竄たれて山野に在れば、人域無きなり。)

り。目は視

耳は聴きて、寂黙を歎くなり。)

九章・悲回風は、主人公が岩山に登って遠く望めば、

路は遙かに続いてひっそりとしており、影や響きの応ずることが無い場所に入り、「聞」き見て思っても何も得られないとする。

前節で『楚辞』において「音」のきき取りは、視覚とともに、現前の世界を把握するための重要な行為であることを指摘した。ここでも「景響」の「応」ずることが無い世界に入れば、視覚的にも、聴覚的にも、更には思考もできず、一切の情報を獲得できなくなることを示されている。そして「音」のきき取りにおいては、「聞」が情報を獲得する行為なのである。

それは次の例でも同じである。

『楚辞』遠遊

下崢嶸而無地兮

下は崢嶸として地無く

上寥廓而無天　上は寥廓として天無し
視儻忽而無見兮　視ては儻忽として見る無く
聽愉悅而無聞　聽きては愉悅として聞く無し
王逸「目瞑眩也。窃無声也。」（目は瞑眩するなり。窃として声無きなり。）

遠遊は、主人公が到達した場所が、下は奥深く地が無く、上は空しく広く天が無く、「視」ても目が眩んで何も見えず、「聽」いても、耳はぼんやりとして何も「聞」こないとする。

ここでは「聽」と「聞」が同時に用いられており、「聽」くは「耳を傾ける」、すなわち何かに意識を向ける行為であり、「視」と対応している。一方の「聞」くは、「見」と対応しており、情報を獲得しようとする行為である。このように『楚辞』の「聽」は、何かに意識を向ける行為を指し、「聞」はそこから情報を獲得する行為を指す。そしてその対象が「人事」だけでなく「自然」「世界」へと拡がっていることが、『楚辞』の特徴として指摘できるであろう。

おわりに

以上本稿では、『楚辞』における自然の音に着目し、『楚辞』の「き（聴・聞）」について検討してきた。

『楚辞』は、視覚に限らず、聴覚的にも細かく自然を捉えようとしている。そしてそこには視覚と聴覚によつ

て、時間＝空間的状况を見定め、自己を取り巻く世界を把握しようとする態度がうかがえ、『楚辞』において「音」のきき取りは、視覚とともに、現前の世界を把握するための重要な行為であったことを指摘した。

また『楚辞』において、「聽」は何かに意識を向ける行為を指し、「聞」はそこから情報を獲得する行為を指すことであつた。そしてその対象が、「人事」から「自然」「世界」へと拡大していることも、『楚辞』の特徴であつた。

では『楚辞』において、自然の音を「き（聴・聞）」くことが、なぜこのように重要な行為とされたのであるうか。その理由について、まず単純に考えれば、『楚辞』の担い手が巫覡であつたことが挙げられる。

巫覡が持つ能力について、『国語』楚語下に以下のような記述がある。

『国語』楚語下

其智能上下比義、其聖能光遠宣朗、其明能光照之、其聰能聽徹之。如是則明神降之。在男曰覡、在女曰巫。（其の智は能く上下に比義し、其の聖は能く光遠宣朗にして、其の明は能く之を光照し、其の聰は能く之を聽徹す。是くのごとくなれば則ち明神は之に降る。男に在りては覡と曰ひ、女に在りては巫と曰ふ。）

ここでは、神と民を比べよい方に順う知性と、遠くま

で明らかに見通す力があり、目でよく照らし見て、耳でよく聴き達することができる人物に、神が降つたのを巫覡と言うとある。このように巫覡は、常人に見えないものを見る目を持ち、聴けないものを聴く耳を持っていたのである。⁶²そしてこの力が『楚辞』における対象の細部や一つの情景を色々な視点・聴点で捉えた自然描写、「音」のきき取りによる変化の先取り、「無音の世界」の発見につながっているのである。ただ巫覡がこのように「自然」「世界」を、なぜ描く必要があったのかということについては、『楚辞』の文学全体の問題として、今後さらに考えていかなければならないであろう。

また今回考察できなかった漢代の『楚辞』諸作品、さらに漢代の詩・賦では、自然の音はどのように表現され、その音を「き（聴・聞）」くことは、どのような意味を持つ行為であったのであろうか。これらのことを今後の課題として考察を行っていきたい。

注

- (1) 拙稿『詩経』における自然の音について（『中国学研究論集』第二〇号・〇八年）。
- (2) 考察を行うのは、「九歌」「離騷」「天問」「九章」「遠遊」「九弁」「招魂」「大招」とする。『楚辞』諸作品の成立年代については、小南一郎氏の推論（『楚辞とその注釈者たち』朋友書店・〇三年）を参照した。
- (3) 『詩経』と『楚辞』の自然の音を比較するにあたって、ま

ず対象の違いについて見ると、『詩経』では、風・雪・雷・川・鳥（一三種類）・馬・鹿・虫（六種類）の音・声を対象とする。これに対して『楚辞』では、風・雷・川・鳥（四種類）・猿・虫（二種類）の音・声を対象とする。したがって『楚辞』では、『詩経』では対象とされなかった猿が加わってはいるものの、その種類は『詩経』に比べて限られていることがわかる。なお『楚辞』において猿が対象とされることについて、松浦友久「猿声考」（『詩語の諸相』研文出版・81年・二〇頁）では、『楚辞』と『詩経』におけるこうした相違は、一つには成立年代の差異に因るものと考えられるであろうが、より直接的には両者の地域的な差異が指摘されるべきであろう。」とする。また『詩経』に比べて鳥・虫の種類が減少していることについては、『楚辞』は秋に関連した対象を選び、他の季節のものを対象としない傾向があることが、原因の一つであると考えることができる。

- (4) 小尾郊一『中国文学に現われた自然と自然観』（岩波書店・62年）一頁～三〇頁参照。
- (5) 後代では次の劉孝綽のように、「嬋嬋」を音を表すオノマトペとして用いるものもある。梁・劉孝綽「詠風詩」（『古詩紀』巻九七）「嬋嬋秋声、習習春吹。」
- (6) 同じ対象の自然描写を見た場合、例えば簡・蘭について、『詩経』陳風・沢陂は「彼沢之陂、有蒲与簡。」毛伝「簡蘭也。」と、簡が生えていることだけを示すのに対して、『楚辞』九歌・少司命は「秋蘭兮青青、綠葉兮紫莖。」と、その葉と莖の色まで視覚的に細かく描写する例が見られる。

(7) 「狄」は、王注本「又」に作る。

(8) 目の焦点の視点に対して、耳の焦点を聴点と言う。堀切実『芭蕉の音風景』(ペリかん社・98年)二四頁参照。

(9) 『楚辞』における秋風には、一節で挙げた九歌・湘夫人「嫋嫋兮秋風、洞庭波兮木葉下。」や、九章・抽思「悲秋風之動容兮、何回極之浮浮。」九弁「悲哉秋之為氣也、蕭瑟兮草木搖落而變衰。」がある。

(10) 小南一郎『楚辞』(筑摩書房・73年)二四六頁参照。

(11) また離騷には、「雄鳩之鳴逝兮、余猶惡其佻巧。」と、鳩を軽薄で言葉巧みに立ち回り、その鳴き声は憎むべきものとして捉えている例がある。これは気候の変化を感じ取るものではないが、自然の音に何かを感じ取っている(鳩の声に不快感を感じている)例である。

(12) ロラン・バルト著・沢崎浩平訳「聴くこと」(『第三の意味』みすず書房・84年)一五七頁参照。

(13) この四句について小南氏は、「自然を凝視したときの異和感」と解説する。注(10)小南氏前掲書一九三頁参照。

(14) 「外部空間の沈黙は重苦しく恐ろしいものに思われる。宇宙飛行士の恐怖を想像してみよう。取り返しのない事故によって宇宙船から切り離され、空虚で静かな宇宙空間に漂う彼を待つのは、死であり、完全な孤独である。この地上でも自然の静けさは、威圧的で、不気味な感覚をもたらすことがある。イーファー・トゥアン著・阿部一訳『感覚の世界』(せりか書房・94年)一〇六頁。

(15) 「非」は、王注本「作」に作る。

(16) 本文に挙げた例の他に、上位の者が下位の者の言葉聞き届ける例には、九章・抽思「橋吾以其美好兮、敖朕辞而不聽。」九章・悲回風「驟諫君而不聽兮、重任石之何益。」大

招「三圭重侯、聴類神只。」がある。離騷「世並舉而好朋兮、夫何覚独而不予聴。」の「予聴」については、姉が主人公になぜ自分の言葉を「聴」かないのか、主人公が周囲の人になぜ自分の言葉を「聴」かないのか、という二つの解釈があるが、いずれにしても同位の者が同位の者の言葉を聞き届けるという例である。また天問に「鸚鵡曳銜、鮫何聴焉。」と、鮫が鸚鵡に従ったという例があるが、これは神話的世界のことであるため、他の用例と同列には扱えないと考える。

(17) 『詩経』における「き(聴・聞)」くの詳細については、注(1)拙稿参照。

(18) 甯戚・桓公の逸話については、『呂氏春秋』举難に「(甯戚)暮宿於郭門之外。桓公郊迎客、夜開門、辟任車、爝火甚盛、從者甚衆。甯戚飯牛居車下、望桓公而悲、擊牛角疾歌。桓公聞之、撫其僕之手曰『異哉。之歌者非常人也。』命後車載之。」とある。また本文に挙げた例の他に、九弁「甯戚謳於車下兮、桓公聞而知之。」がある。

(19) 本文に挙げた例の他に、九章・抽思「夫何極而不至兮、故遠聞而難虧。」がある。

(20) ある事実や評判を聞き知っている例は、他に九歌・湘夫人「聞佳人兮召予、將騰駕兮偕逝。」、遠遊「聞赤松之清塵兮、願承風乎遺則。」、遠遊「聞至貴而遂徂兮、忽乎吾將行。」がある。また遠遊には「往者余弗及兮、來者吾不聞。」と、先

のことを聞き知ることができないという例がある。

(21) 本文に挙げた例の他に、九章・抽思「茲歷情以陳辭兮、
蓀詳豐而不聞。」がある。

(22) 注(10) 小南氏前掲書三四頁参照。